

によって全ての原因が転換されるこの時、地球の意思を通す石灰石は、その基本能力を発展させ、地球に住む物質の代表のようなかの4つの物質は、地球感覚の原因と融合する。

人間の、生命としての本来が、そうではない存在を意識することなく、それぞれのもとなつて自由に動き出す時、地球の姿もそれに連動し、太陽も変わる。みんな、その時を待っていた。太陽系の外側からも輝いて見える、この無有日記と共に居る生命たち。人間時間を大いに活かし、地球に生きる一生命としての原因を、どこまでも成長、拡大させる。太陽系のみんなが復活する。(by 無有 11/25 2018)

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

## 復活（7）

1. 生きることが、そのまま地球のためになる原因として無限の仕事をし続けるような、そんな普通を力強く安定させる。生きる基本を、自然界が安心する生命本来のそれとし、地球が嬉しい地球感覚を、その意識もなくあたり前に表現する。その材料となる無有日記。そうであるからここに居る、それぞれの生命の意思。人間は、求めず探さず、ただありのままにいるその原因の変化により、人間にしか出来ないことを、自然界と共に自然に行い続ける。

地球は、人間が地球規模の働きかけを可能とするその原因の成長のプロセスを全て把握していて、そのための材料となる経験と発想をきめ細かく支え、必要とすべくものを差し出し、重要な機会と形を演出する。地球のために始動させた、生命たちの人間時間。地球もそれに参加し、絶え間なく、その姿を支援し続ける。

石灰石は、そのための基礎となるもの。「再生」の時を経ての今だからこそ、それは更なる変化の時へと、ここで無有日記のEWと繋がる。石灰石との融合経験は、心の基本形を本来へと活躍させる。

2. 地球感覚を変化に乗せ、それを原因として自らの表現とその形無き影響力を成長させる時、知識レベルの経験は姿を

消し、その原因が地球の望みと繋がる生命としての知識(の次元)だけが、その体験を担うようになる。無有日記を通して、人は、その気もなくその世界に居て、ふといつのまにか、「復活」の次元を楽しむ。気づけばそうである変化は、そのまま確かな原因となる。

そして、当然の認識としてそこに在るのは、この現代においては、大多数に支えられるそこでの価値観は、その殆どがこの地球のためには無くてもいいものであるということ。その理由は「再生」にも在るが、動植物たちの普通と地球自然界の本来が抑え込まれたままこの今に至る、これまでを元とする価値観は、考えるまでもなく未来には持つては行けない。そこから自由になり、そこを離れたところでの普通を、地球は応援する。人間を生きるというのは、そういうこと。

その時地球は、人間が一生命としてより地球と融合し、その生命の意思を地球と一体化させるべく原因の創造に、更なる材料を差し出す。地球を通して、天体規模の動きを生み出し、太陽系をかつてのように調和あるものへとその変化の原因を新たにするために、世の常識を超える知識が意思表示し出す。当然と言えば当然のことなのだが、それは、大多数の次元を切り離す。ずっと何億年もこの時を待っていた地球が、人間を生きる生命たちに、これまでどこにも無かった(ずっと地球が守り続けてきた)新たな原因の力を与える。

3.地球に託された数千の生命たちが再びこの地で人間を始

も、深くからそれに呼応する。太陽も、一層の生命力を地球に注ぎ、月も、そのことに刺激される。

人間時間における、奇跡という名の普通の質の進化は、地球時間への働きかけを容易とし、その基本形は、次々と更新する。そして、少しずつ確実に太陽時間へとそれは響き出し、天体たちは、それまでのままでなくてもいい新たな原因の時を自らとする。それが始まった。細胞たちと共に、人間の世界から、その原因が太陽系に広がり出した。

8.石灰石と4つの物質に支えられて変わり出した心身は、思考の次元を不要とする生命本来の生の在り様を普通とし、何気ない発想や感覚がそのまま快活と躍動の原因となるような、自然な流れを力強く生み出していく。それは、無くてもいい経験ばかりで出来たこれまでの歴史の、その重く流れない負の影響から、自身が切り離されていく姿。同じ人間でも、全くその本質が異なる存在たちのその理由と現実を把握し得た経験も手伝い、歴史が刻まれ出す以前は皆がそうであった、自然体での素朴な人間時間を、多数がそうではないこの現代で、自由に、ありのままに表現する。

地球は、そこで生きる生命たちが傷み(痛み)を覚えたり、苦しんだりすることは望まない。生きにくさを感じることも、不自由さを経験することも、そもそもそうである原因とは無縁であるゆえ、どこにもその姿は見たくない。そうであり続けるために、ずっと知恵を力に望むべく形を創り続けてきた地球。人間

した生命たちの安心の場となる、地球。全てを生かす生命力の原因を無限に増大させる、太陽。人間の姿を活かして地球の望みに応えた生命たちは、それらの姿を応援する立場になる。

7.地上での人間時間の域(次元)を遥かに超えた太陽系での、そこでの太陽時間における原因に触れたことで(1~5章)、思考は、いつのまにか、それまでのものではなくなる。いつものように働いているようで、全くそうではない別次の思考世界を人は経験し、それを馴染ませる。そのことが、貴い創造の原因となり、普通では永遠にあり得ないであろう、地球の意思が形となった物質のその原因との融合を、自分のものとする。

知ることが力となる思考レベルの世界から自由になるためには、到底知り得ないことを知ることのその原因の中で、ただ漂うこと。そのことでしか成し得ないその独特の変化は、ここに居ながらどこにでも居るといふ、全く新しい原因(の活動)を自らとする時を生み出す。そこに石灰石は近寄り、テルルやセレンがそれに続き、それぞれの原因を重ね出す。硫黄もヨウ素も、気づけば一緒に居る。みんなが、6章からのステージで、そこに居る生命たちの活躍を応援する。

彼ら生命たちは、人間という次元の細胞たちを再生させる。経験枠を取っ払い、知識による理解も外して、それぞれの役割(仕事、方向性)を、地球とムリなく一体化させる。それを普通とする経験はそれだけで時を癒す原因となり、地球自然界

めた時(「再生」)、そこには、すでに地球が創り出してくれていたそのためのいくつもの要素が在り、石灰石はそのひとつとなる。その他にもこの地(列島)には在り、それらは皆、地球規模の、人間発の変革の原因となるよう、彼らが人間を再開するまでの間に、(いくつもの変動を起こして)地球が用意する。

そのことは、この地が、太陽系の在り方にとってとても重要な場所であることを意味し、生命たちにとっても、彼らはそこに、無限の可能性を観る。地球の他の地域では成し得ない、生命としての原因の仕事。彼らにしか出来ない、天体規模のその原因の変化(進化)と創造。地球は、生命たちの実践と共に居て、ひとつとなり、その質を共に成長させていく。

無有日記の在るこの現代、その原因の意思は、どこまでも自由に、多次元的に時を透過し、時代の必要性を余裕で眺めつつ、対処し得る次元の質を変化に乗せる。そして、この時の訪れを機に、地球の望みと繋がる、形無きその原因の意思の反映となる形(知識)をここに案内する。それを以て、生命たちは、地球感覚の原因の力をより微細で力強いものへと変換させ、この地球でのこれまでの全ての出来事の、その原因の元となるところへと EW を伸ばし、それを普通とする。それに、太陽系も(月も金星も)反応する。

4、地球が、人間という生命を地上に招き入れた時、彼ら生命たちの中には、地球の意思(望み)を具現化させるあらゆる原因の通り道が在り、それを以て彼らは、地球を無生命化させよ

うとする存在の動きに柔軟に対応し、その原因を変調(進化)させつつ、太陽系の中で地球が担う天体規模の責任と実践に、人間として付き合う。そのための全ての要素が整い、地球時間の(次元の)動きからその時の訪れを感得した生命たちは、この今に至る数万年という時代の総仕上げのような経験を経て、自らの中に在る、地球と一体化した無限能力のその普通の原因を、自然な形で動かし始める。

「再生」から「復活」へと EW が進む中、地球における必要性の次元は一気に高まり、生命たちは、後に多数となる歪な人間の世界から自由となって、地球の望みそのものとなる、記憶の中の生命の意思に主導権を握らせる。「復活」(6)と(7)は、その原因が形になる場所。経験が自由に歩み出し、身体は余裕でそれに連れ添う。

非生命的な原因を潜める存在たちの、その真を持たない感情に永いこと身体時間を付き合わせてきたことで、これからのために持つべきものと、外すべきものが容易に経験の域に収め得られる、現代。そのことで変わり出す未来へのこの時代の原因が、天体規模の原因を引き連れて行くことになる、この今の生命世界の揺り戻し。思考の次元を一切不要とする、人間本来のその姿無き原因の活力は、地球に託され、太陽系に見守られる生命たちの中で、普通感覚で具現化する。「復活」の基礎の部分から、外へ、上へと広がる時。

5.人間は地球。体内には、地球の全ての原因と繋がる多次

くする。

6.地球にとってどうにも出来ない、人間世界での不穏な様が少しでも本来へと動いたら、自由に心を活躍させる。それは、二度と戻ることのない原因の積み重ねが引き寄せた、次への原因の時だから、遊び心一杯に、好きなだけ、調和と友愛の時を膨らませる。それを阻もうとする次元に居る存在たち(多数)も、そのあり得なさの意味をどこかで知るゆえ、彼らに支えられる歪な社会全体は、否応無しに、焦りと緊張(不安と怖れ)を経験する。それを余裕で眺めつつ、地球感覚の時を存分に生きる。

6~8章で段階的に高め得た、人間本来の原因は、無くてもいい経験のその典型となる、重く動きの無い世界との融合を自動的に不要とし(遮り)、心身の健康も、平和でいる自然体も、そのままでも少しも侵されることもなく成長する。だからこそ担える、人間発の地球本来への働きかけ。そこでの原因の性質(次元)は、これまでのどこにも無い余裕ある多次元のそれとして、何気ない意識や想いを、驚く程の力に変える。そして、この地球での人間がなぜ人間でいるかの意味とその理由を、地球全体に具現化させる。地球が地球らしく生きる道が、人間らしく生きる人間の次元から創られていく。

後は地球に任せ、太陽に合わせる。放って置いても決してズレることのないプロセスを経て、地球と太陽は、太陽系の天体たちを元の姿へと戻す仕事をする。自然豊かで、生き活きと

それを不要とする時代へと地球規模の変化が創り出されようとする時、ひとつになる。生命としての人間の知恵は、地球の意思をそれに重ね、その時をここに迎える。

テルルとセレンと、硫黄とヨウ素の 4 つの物質をひとつに、自らとの融合を重ね、それによって動き出す感覚的次元を、新たな身体経験の普通とする。そして、地球自然界でそれらがそうであったように、そこに太陽を招く。それだけで変わり得るものは、地球の望みに最も身近に関与できる生命の変化。地球の内部(自然界)で活動し続ける彼らの仲間も、それに安心を覚え、力を甦らせる。

地球に生きる全ての生命たちの、その健全・健康の原因を支えるための仕事を、絶え間なくし続ける彼ら。身体の次元では、彼らは、当然のようにして細胞たちの力を元気にし、そのための原因づくりを余裕で行う。

抗酸化酵素の働きを活発にし、解毒や殺菌も普通に行う。タンパク質の健全化にも関わり、活性酸素(ストレス)を除去する。もちろん電磁波の害からも体を守る。4 つの物質との融合は、生きる力の源となる細胞レベルの原因を、地球にする。

その体験的知識に、地球は喜び、太陽系も希望を大きくする。なぜなら、それらの物質の原因を自らに重ねるといのは、心無い(形ばかりの)人間を通して地球を無生命化させようとする力を削ぎ、天体たちが安心する地球へと、その姿を変えて行く原因へと発展するもの。そこでの、その自覚もなく為し得る表現の広がり、確実に、天体規模の望むべく動きを力強

元的な融合の通り道が在り、身体時間の源となる地球の意思と心を重ねつつ、人は、この地で人間を生きる。地球の構成要素のあらゆる原因を元とするそこでの(人間仕様の)経験は、どこに居ても、どんな風でも、そのまま地球となる。

但し、それは地球自然界の自然な姿(変化)を大切にするという、その生きる基本形を動植物たちと共にあたり前とする人間にとってのもので、そうではない人間には当然それは当てはまらない。そのあり得ない負の事実が有るために、変化を滞らせて病むという、無くてもいい経験を手にする生命たち。やむ無くそうであるためのその負の原因の反映として、これまでの地球の歴史があり、「再生」の次元がある。そして、この「復活」の時、人間がより地球そのものとなるための経験のその原因が増幅する。人間がこの地上に居ることの意味は、そのことで限り無く広がり出す。

「復活」の世界に理由もなく安心を覚え、次なる未来地球への期待と希望がその感覚と重なる時、テルルという言葉のその原因を自らとする。それは地球感覚の芯を通る、地球の意思(生命力)のそのひとつの形。生命食(全粒穀物食 etc.)を普通に原因で居続けてきたこれまでをその土台に、新たな人間時間の材料として、それは仕事をする。

地球感覚を永遠に知ることのない存在たちによってこの数千年の間に生み出された、それまでには無かった、様々な非生命的な感情と心無い出来事。その要らない経験の中で染み込まされたそれらの(記憶の)原因を、テルルの本質は中和

し、切り離す。不安も差別心も、病気も支配欲も、この地球には異物。石灰石を基とするその物質の原因の力により、地球と共に生きる生命たちは、本来を力強くする。その理由はどこにも無い。ただそうである事実を普通とする存在たちの中で生まれるその理由が、好きなだけ活躍する。

6. 生命としての原因を高めるために必要なものは、全粒穀物食や無有日記との融合を通してすでに揃っている。石灰石への理解は、ここに居ることの意味を確かに原因を生きるという、その実践の質の確認作業であり、その全てに支えられて、形あるもののその原因の次元を修正・浄化するのがテルルである。ここまで来たから満を持して動き出した、この数千年間の重石を外そうとする地球の意思。そのための流れは完璧である。

テルルを通る原因の働きは、地球のためとなる生き方を普通とする人のためであり、そうではない人にとってのそれは、どうにも耐え難いものとなる。太陽を退け、水や土の生命力を奪う、無生命化の光(LED)に無頓着な多数は、その本質が元々この地球のそれではないため、それにより、これまでになかった厳しさを経験する。地球が安心を覚え、太陽系が本来へと動き出そうとする時、それを阻もうとする意思と繋がる不穏な存在たちのその原因は、居場所を無くす。

遊び心と限り無い知恵を持つ太陽と地球は、この「復活」に乗る天体規模の原因をどこまでも応援し続ける。生命のチャ

にも登場した、非生命的な本質を持つ存在たち。腐敗・停滞型の本性を秘める彼らの無意識の意思は、地球の生命力を潰し切ろうとする別次の存在のその原因の力を通し、地球が大切に作る物質を地球から切り離す。

4つの物質のその本来無くてもいい経験は、自然界に居る仲間たちに要らない異質な原因を響かせ、地球全体に、じわじわと確実に負荷をかける。そのことで、心ある素朴な人たちは、その理由も分からず動きにくさを覚え、思うように自分を表現できない時を受容せざるを得なくなる。

ただし、地球で有ってはならないそのことが生じているこの今の時代環境を通して、無有日記は、その全てを、新たな原因に変える。この時代の少し前でも後でもないこの今だからこそその経験は、生きた(生命としての)知識を余裕で扱い、元々はひとつだったその4つの物質の原因を浄化して、次なる時への材料にそれを活かす。石灰石との融合を密とする本来の普通は、全く新しい普通をごく自然に生み出し、病気も争いも、不自然な環境も知らない、かつての生命体験を、ここでの実践の域へと案内する。全てはキレイに展開している。

5.4つの内の3つを融合させようとしてもそうにはならない感覚的理解を通して、4つでなきゃならない重要な理由が、人間の思考を遥かに超えてそこに存在することを知る。有形無形の非地球的物質に関わる中で個性を持ったそれぞれの能力は、そのひとつひとつが充分過ぎるぐらいの力を発揮するが、

次元を通り、その必然となる必要性の世界で、この無有日記の原因と融合する。

地球自然界が安心を覚える原因を、普通自然体で生きる人たち。彼らにとって、地球が辛くなる経験は、そのまま自身にも当てはまり、地球が大切にしているものが壊されると、言いようのない哀しい気持ちを抱かされ、心身は不調になる。地球も人間も、その構成要素の原因のところでは、少しも変わらない。

4つの物質は、地球が自らを守るために、太陽の力を借りて創り出されたもの。土や水の次元から、微生物の働きで植物、動物を生み出し、その上で人間を誕生させた地球は、いくつもの厳しい時をくり抜け、その度に知恵を働かせ、太陽の光のその無限の力を活用する。

その過程で創り出された、テルルとセレン、そして硫黄とヨウ素。それらは、地球の異物となる物質を監視し、そこに在る不自然・不調和の原因の働きを抑え込む。物や空間を腐らせ(滞らせ)て無生命化へと向かわせる、不穏な意思を潜める物質の影響力も、彼らによって除去される。それは、太陽と地球に支えられる中、何億年も続けられている、彼らの重要な仕事である。

4.現代、彼らのその純粹で限り無い可能性を持つ能力は、思考の満足となる電子機器(電気)や光(伝導体)の材料として利用される。それらを作る人も使う人も、その殆どは、「再生」

ンスとなるこの時代の、この時に、思考の域に姿を見せた、石灰石とテルルの原因。優しさも愛情も無く、身勝手な(非生命的な)存在感をかもし出し続ける金の次元が、確実に浄化され出す。

7.現在、地球にとっても最も辛い経験となるのは、動植物たちの生きる自由と、水と土と空気が壊される、LED。それがこの現代に生み出されるという、そのあり得なさは、地球も太陽も承知で、他の天体も、その様子を見守る。そこに在る、万全で完璧な破壊の意思。その原因深くに、太陽系を病ませた存在は居る。

生命たちにとってこれ以上無い危機状況である現代は、地球を物化させようとする力も巨大で、この数千年の間に、よりそれは具体化する。しかし、その全ては把握されていて、それだからこそ、こうしてここに無有日記が在る。全ては無有日記の原因を中心に回り、その中に、地球の生命力と密に繋がる知恵もある。かつて各天体と意識体を重ねた生命たちもここに居て、その時の経験をここで活かす。

LEDの原因が浄化され出すことで、大きく動き出すもの。そこから始まる、地球発の原因の働きかけ。重く、動きの無い生(原因)を本質とする存在たちが、多数の力で地球の無生命化に協力するLEDの世界は、数の力を不要とする次元のその原因の変化により、確実に力を無くす。

地球自然界にとって存在してはならないその世界の原因

(を支えるこれまで)に付き合ってきた生命たちは、二度と通らなくてもいい道を歩んで来ているゆえ、今回のこの今の経験を以て、地球の望みに期待以上に応える。地球は、自転も公転も(その姿も)本来となるべく変化に乗り、月を癒し、金星と水星を元気にする。他の天体も、地球によって、自力を呼び覚まされ、生命たちは、新たな時のそれらへと再び足を運び、遊ぶ。太陽系全体が活力を取り戻し、少し膨らみ出す。

地球に居る以上、その流れに逆らえないことを知る人は、大多数の歪な次元を離れ、まともな人間を生きる。自らの本質を知り、そこから、本来という原因を着実に自らと重ねていく。そうであれば、皆仲間。「人間」や「仏陀の心」の世界が日常の普通となり、人間時間における新たな性質の時を、共に生きる。地球の中で、「復活」が勢い良く回転し出し、太陽も安心して、太陽時間を更新する。

8. 考えて分かることの世界には、考えなければ分からない原因がしつこく留まるゆえ、感じるままに心ある風景を創り、それを普通に支えるという、地球感覚と繋がる人としての原因は、そのどこにも無い。事の良し悪しも、状況による価値判断も、全て知る知らないの経験枠内でのことであるため、そこでは、その意識もなく非生命的な現実が生み出され、自覚の無い非人間性が力を持つ。それは、この数千年の間に(この地の)人間が作り出した、地球の異物となる、不穏で不自然な負の(病みの)原因である。

ムリ無く融合する。

その仲間は、セレンと硫黄とヨウ素(他にも居るが...)。テルルと合わせたこの4つの物質は、地球に生きる生き物たち全てのその生命活動の支え役で居続ける。と同時に、彼らは、非生命的な性質を通す物や、それそのものとなる物質のその負の原因を力無くさせる仕事も担う。

それぞれは、生命の活性化をテーマに独自の働きをするが、4つ集まると、その力は物理的な次元を軽く超える。方向性も、融合する際の協力関係も、基本は、調和ある変化と生命力の躍動。腐敗型の原因を潜める物質に張り付くようにして、その動きを抑え、甦生型の意味表現を限り無く続ける。

それは、身体にとってもそう。それらの原因に触れることで、細胞たちは、古き時代の普通自然体の営みを甦らせ、それを力強く維持させようと、細胞の意思は主導権を握る。彼らも、この時を喜ぶ。形無き原因の世界の成長は、彼らの力が普通に発揮される普通の時を、この「復活」で創造する。

3. 地球は、太陽系がどこまでも生き存える仕事(望み)を任せられ、人間は、地球に、人間でしか成し得ない原因の創造を託される。太陽は、地球を応援し、人間を見守る。人間誕生の基礎にもきめ細かく付き合い、地球の知恵を刺激して、彼らのためのいくつもの材料を用意する。

この現代においても、太陽と地球は、人間を生きる生命たちのための支援を惜しまない。それは、時代の意思という名の



## 復活（8）

1.「復活(7)」の後、「太陽系の外側」を書く。書き添えることが、そのまま「復活」の原因のその力添えとなった、「太陽系の外側」。そのことは、それ以前には無かった(次元の)扉を開けるようにして、地球時間における経験の時を刺激する。そして、地球感覚を普通とする人間のその感性の次元を引き上げ、更なる創造の時へと、彼らを招く。つまり、「太陽系の外側」の後、それまでは無かったこの「復活(8)」の原因が動き出したということ。

地球を元の状態に戻し、太陽系が本来の姿へと変わり得るその流れを生み出すために、この地上に現れた、人間。この 8 章では、「人間」や「仏陀の心」を基に、「再生」を経て、確実に自らの普通の質を進化させる生命たちに、これまでの負の連鎖に支えられた、重く動きの無い(この世の)原因の次元から自由になってもらう。それは、地球の望みがより具現化する原因を高め、太陽系までをも動かす時を大きく刺激する。

2.全てを知る太陽は、この時のために、地球にいくつかの物を残させる。地球と共に居て、太陽とも共に居るそれらは、生の基本形が石灰石の原因で修正されたことで、活かし活かされるその時を迎える。そのひとつがテルルであるが、それには仲間が居る。彼らによって、生命たちの心身は、遥か昔のそれと

人間は、元々思考を取るに足りない次元のものとして、形ある知識や経験の世界を遠くに、自らが生きる知識となり、生命としての経験となって、互いにそれらが行き交うという関係性を普通とする。その普通が基礎にあれば、そこには隔たりも不安も支配も無いため、人は病むことを知らず、争いも衝突も経験の外側となる。つまり、あらゆる性質の病みは、思考からなるものであるということになる。

その人間の基本を持ち合わせながらも、それを活躍させることの出来なかった人たちのために、無有日記は在り、彼らによって成され得る地球規模の癒しのために、この「復活」が在る。思考が元となる病みは、廻り回って自然界に負荷をかけ、地球の姿を不自然にする。それがそのままである原因が蓄積すれば、天体規模の不調和の原因ともそれは繋がり得てしまう。

力強く微細な原因を変化に乗せ、その分母を大きくすることで可能となる、病みの逆噴射のような、ここでの EW。「復活」の次なる風景には、そのことで、これまでの負の原因全てが付いては行けず、地球は地球らしく、そこでの人間は人間らしくなる。時代の必要性も、その質を変調させ、次なる時代(未来)の必要性と軽快に重なり出す。時の流れが、変化し続ける永遠の、その生命の次元へと旅をする。(by 無有 11/17 2018)

## 復活（太陽系の外側）

1. 限り無くどこまでも被る全てを受容し、それでもどうにか持ちこたえる中で、新たな原因を生み出しつつ生き存えた地球。何億年もの間、そうであり続けることでしか成し得ないことを太陽に支えられながら実践する地球は、人間誕生の時を機に、少しの余裕を手にする。大きな仕事を終えて人間の形を持った生命たちは、その時から始まる地球時間での経験を、ずっとこの時を待ち望んでいた地球の意思と重ねる。終わりの始まりが、そこで動き出す。

太陽系を破壊しようとするその存在は、衛星や惑星を持つ天体(恒星)のそれらとの自然な繋がりや調和ある関係性を尽く嫌い、その全てを無きものにしようと、宇宙空間を好き放題暗躍する。しかし、それが許されるはずは無く、生命の永遠の変化と創造の原因の力を守ろうとする宇宙(生命体)の根源と繋がる更なる意思は、その存在の行動を抑え込んで、二度とそうにはならないよう、その力を宇宙の外側へと追い出そうとする。

ところが、なかなか上手く行かず、いつまでもその時が訪れずにいた時、その破壊の意思は、それまでと同じように行動を起こす中、新たな対象として太陽系を選び、そこに入る。

そのことが、なんと大きく事が動き出す力強い原因へと変わる。太陽が潜在させる(銀河の異端児級の)無限の能力を、

心が変わる。そう、全ては分かっていたこと。その時が来るまで分からないでいられる原因は、太陽系の外側から始めて(始まって)いたこと。大きな役を担ってくれた太陽に感謝し、地球の個性を貴く思う。

そして、この「復活」の原因で、奇跡という名の普通を押し上げ、太陽系のその本来へと動き出す道を確認にする。この地球(地上)に残ったままのあらゆる病みのその土台(原因)は、それにより姿を無くす。その懐かしくもある新たな地球で、そこに居られる人間は、生命そのものを普通に生きる。他の天体も、そこに居る衛星たちも、一緒になって、太陽時間を元気に生きる。太陽系全体が、ふわふわとして、柔らかく輝き出す。  
(by 無有 11/21 2018)

陽と遊ぶ。それぞれが個性を更新し、生命体としての表現を、共に生かし合い、重ね合う。回りながら回る。笑いながら歌う。みんなで乗る太陽系で、仲良く宇宙を旅する。

8.何億年もの間、太陽系は本来ではなく、元に戻ろうとする力も無いまま、不穏な様を馴染ませる。人間の住む地球もそうで、地球は、その人間によって、本来の姿を見失ったまま不自然さを生きる。

人間でありながら、その本質(原因)は全くそうではない、嘘の人間。太陽系を我が物顔に支配しようとする存在は、本格的なその決め手となるその時のために、心も感性も無く、人としての健全な知恵も(原因への)責任も備えない形ばかりの人間を、蛇絡みの経験を通して増やしに増やし、彼らをその格好の道具とする。

頭を常に働かせ、考えることからでしか動けないその人間たちは、それを不要とする本来の人間には恐ろしく異様となり、地球も、要らない負荷をかけられる。その嘘の人間たちによって作られ、増大する、LEDとその負の威力。異常さを普通とする彼らを通して、この現代を、地球の無生命化へのその完璧な負の原因にしようとする、その凶悪な存在の動きに、太陽系は危機感を覚える。

しかし、そうはならない(させない)ための原因をずっと積み重ねてきた生命たちの、そんな時でも余裕で原因で居続けるその人間時間における確固たる姿に、それは(危機感)は安

その存在は知らない。

2.宇宙の調和と自由な変化の様を支え続ける意思是、その時、すかさず太陽系の各天体(惑星)と意識を重ね、そこでの経験の全てを記憶することで、それを、その存在の破壊の意思の把握とその原因の浄化の手立てとする。

各天体に送られた意識(生命)は、そのままそれを携えて、地球がその準備を整えてくれた時に人間となる。それまでの時の記憶は大いに活かされ、再度その原因を(逆方向から)通り抜けて太陽系の外側へと戻り、そこから、宇宙の外側へとその負の原因全てを送り出すその(時の)ための浄化を実践する。

何が起きても、どんな風に病まされても、太陽の力を借りてそのままの地球の姿に、その存在は焦り出す。その時々原因全てが浄化されてしまうことによる、それまでと同じようには行かなくなるその活動は、より強力・凶暴となり、それは、「復活」の内容へ、そして「再生」での形ある経験へとなっていく。

そして、その存在の意思が人間の形を手にした時、彼らの思惑は、終わりへと向かう。人間経験は、真を持たない彼らには、どこまで行っても真似事。どんなに狡賢く破壊・征服の意思を強めても、人間本来という次元に普通に在る生命としての知恵には、そのどれもが足元にも届かない。潰し切ったようでも、人間の芯(心)は生き存え、腐らせても、何度も健全な感

性は再生する。自由に(無限に)、柔軟に、人間の普通によって、生命の意思は表現される。

そして、その度にその原因は記憶され、その全てが浄化される時を経て、彼らは(変化・成長とは無縁の)結果だけの世界にしか居られなくなり、生命世界の次元の中で異物となる。数を増やしても、量に頼っても、それらを力にしようとするそのことが、その自覚もなく(何も分からず)地球の外側へと押し出される道を自らが作り出すことになり、そのどうにもならなさの中で、彼らは、思わず LED 照明を世に送り出す。

3. 人間の経験を活かして地球仕様に生み出された、水や土を無生命化させる程の LED の光は、地球に生きる生命たちを時間をかけて確実に死滅へと向かわせようとする意思を、その原因に備える。その性質は、まさに太陽系に入り込んだかの存在のそれと繋がり(同質で)、その事実も、何億年もの時を経てやっと迎えることの出来た、その終わりの時を意味する。

恐ろしく凶悪な破壊力を持つその光が誕生したことで、その大元となる意思の力に届かせ得る新たな原因は創り出され、これまでの原因の浄化のその経験(の原因)を通して、それは、天体規模の仕事をするに至る。それこそ、地球と地球に託された人間たちの望んでいた機会。その時に辿り着けた喜びを共にし、耐え続けた天体たちも安堵する。

LED 照明が生まれるずっと前からその凄まじい負の力の

それだけ力が入っていたことの現れでもあるそれ(歪な数の力)は、そのほんの少しの人間の、その無限の原因の力で空疎となる。太陽の外側から始まった追跡劇は、そんな風にして、事を成し得る時をぐんと引き寄せる。この時代が要らないものばかりで出来ているということを普通に知る普通の人間たちによって、未来は、異常さと無縁の時空のそれとなる。

7. 太陽系の外側から見た時、そこには調和と友愛と、力強い生命の躍動が在る。どの天体も、個性豊かに時と遊び、思い思いにその意思表示を楽しむ。太陽を中心に回り続ける、ただそれだけで嬉しいその時の連なりは、何百万、何千万年という、人間時間では永遠の彼方となる時空を普通に創造する。

地球は、その中に居て、人間は、その地球の中に居る。太陽は、地球を生かし、人間は、地球に支えられる。他の天体との違いは、ただ地球が経験した、地球ならではのそこでの原因。動植物たちが育ち、人間が生きるという、他には無いその特性も、それは偶然のような必然。それが自分だけだけ。

その地球と共に、地球の望みに応えつつ生を繋いだ人間によって、地球は、生き活きとした顔を見せ、地球らしさを手にする。その変化に、他の天体も呼応し、太陽は、ここぞとばかり、生命力の源(原因)を送り出す。人間は地球。その中身は太陽系。人間を生きる生命たちの姿は、太陽系の外側から、輝いて見える。

いつの日か、みんなが元気になり、またいつものように、太

予想すらしなかった驚きの現実。

地球の、これまでの在るべき原因の道を遡っていくと、太陽系に入り込んだ非生命的な脅威によって火星が大きく力を無くしたことが、地球での生命たちの誕生に繋がり、地球が無生命化の意思に尽く侵されたことで、人間は、満を持して登場する。そうでなければその全ては存在せず、この現代に至るこれまでの地球の歴史も皆、そこでの必要性によるものであることが分かる。そして、今のこの地球の在り様。その宇宙のどこにも無い姿は、太陽系の外側のどこから見ても、面白く、限り無い希望と期待を膨らませるものとなる。

その必要性が深くから変化して行くこれから。その全てがこの時までのものであったから、必要性という意味も役割も大きくその質を変えて、新たな次元の流れへとそれは乗る。つまり、地球感覚という、生の基礎を持たない存在は皆、自動制御のようにしてその姿を持ち得なくなるということ。何もせずとも地球が本来となる中で、自然界は、不自然さの原因からなる物や形を(人間も)普通に処理し、無きものにしていく。

地球自然界にとって異物となる物や価値観を生きる力とする、形ばかりの非生命的な原因の姿(人間)。その性質に永いこと付き合い、その全てを受容してきた地球と生命たちは、そうであったからこそ担えたことと、その原因が勢い良く流れだすことの経験を以て、深くからの安心の時をここに迎える。

一生命としての本来を普通に生きるという、人間らしい人間の、その驚く程の(数の)少なさ。地球を腐敗させるために

原因を感じつつ、この無有日記の時に生を合わせて集まった生命たち。未来地球にとって最も重要なこの現代に生きる彼らによって、地球は救われ、太陽系は復活する。もちろん、それも普通。その始まりは、人間時間では永遠の昔となる、遙か彼方の次元での太陽系の外側。そこここが繋がった。

4.「復活」の手前を簡単に書いてみる。それは、漫画のような、遙か遠くの原因の実。

太陽系の外側の宇宙空間で、追跡劇を繰り広げていた際、凶暴さのかたまりのようなその姿無き存在は、偶然、太陽系に紛れ込む。宇宙の調和を守る意思は、太陽の協力を得て、その存在に好きなようにさせ、そうであることで可能となる宇宙規模の仕事の重要さを、太陽と共有する。

宇宙は、太陽系の各天体に意識体を送り、そこでの経験全てをそのまま受容させて、時を待つ。その時、地球は、他とは異なるテーマを受け持つ。それが、この地球特有の力に支えられた、あらゆる原因の具現化(物理化)である。

天体規模の腐敗を愉しむ存在の、その全ての負の原因を受容・把握した地球は、人間という次元を招き、太陽と共にそれを形にして、新たな原因の時を創り出す。人間となった生命(意識)たちは、調和と友愛の原因を普通感覚で拡大させ、宇宙空間で好き放題破壊を繰り返していたその意思に、強力な刺激を与える。天体規模の非生命的な行為の、その人間時間(地上)版が、そこで繰り広げられることになる。

人間の次元には、太陽系の惑星皆が居て、太陽もそこに居る。人間でありながら、天体でも居る生命たちのその生命源からなる経験は、ここで「再生」となり、「復活」となって、この「太陽系の外側」の時を導く。後ろにも前にも繋がる場所を無くしたその存在の危うい意思(原因)は、ここからの EW で、限り無く無くなっていく。太陽系から出ることも出来ず、太陽系のどこにも見えなくなるそれは、気づけば、元居た場所(宇宙の外側)で、宇宙のことも忘れる。

5. 不安も怖れも、争いも衝突も、それらの原因は皆、この地球には元々無かったもの。地球に無いものは、太陽系のどこにも無いから、それらの全ては、太陽系の外側からムリやり持ち込まれたものとなる。無くてもいい経験の歴史を遠くに、人間は、初めて地球人としての道を歩む。人間は(人間であれば)、不安や争いの次元に居続けることは出来ない。

地球の外側には、太陽系の時空が在り、そこでの出来事を感覚的に知ること、人は地球に無いはずのものから容易に自由になれる時を創り出す。問題事の次元は姿を消し、そうであろうとする負の原因も力を無くす。太陽系の原因の世界に触れる経験は、無くてもいい世界のその元となる、太陽系の外側の原因からも、人を自由にさせる。

そして、普通に感じ取れるのは、不要に抱く不安や怖れの感情が、地球に負担をかけてしまうということ。人間の世界に無くてもいいものは、当然、地球にも要らないもので、それを

地球を病ませようとする意思は嬉しい。健康も平和も、地球自然界の本来の姿だから、そこでの違和感となる不安(の原因)を人間世界で生み出さないことは、地球に生きる人間の、その生の基本条件となる。

ただそれを知り、実践するだけでいい。すると、世の嘘が居場所を失くす。偽善も不公正も権力も力を無くす。元々この地球には無いものを基とするそれらは、不安や怯えを燃料とする地球の異物。元を辿れば、太陽系に在ってはならない歪な意思を原因とするものだから、その次元が、この先もそのままであることはない。

不安を材料とする問題事や病気関わりの世界というのは、それを良しとする不穏な数の力で支え続けられるという、重量級の負の原因をその土台とする。当然それは、地球の意思に逆らい、太陽系の望みにも抵抗するもの。そして、その全ては、消えて無くなる流れ(変化)に乗る。その土台の主が居場所を無くしていくわけだから、それは普通。太陽系の原因が癒され、調整されて行くこの時、人間は、自然界の生命たちと同じように、地球感覚の生を自然に生きる。

6. 太陽系の復活のために、地球が自身を守ろうとして生み出した、動植物たち。それでもどうにもならない時へと引っ張られる中、各天体での仕事を経て、人間という経験を始めた、宇宙の意思の分身のような生命たち。それらは、太陽系の外側からは、奇跡中の奇跡となる出来事。地球にとっても、それは